

つま先立ちで恋してる

目次

つま先立ちで恋してる

5

あなたは僕がどれだけあなたを
好きかまだ知らない

273

つま先立ちで恋してる

『——僕と恋する練習をしましょう』

あの日の約束を、彼は覚えているだろうか。

高級な靴ほど安定感があるという友人の話を、なるほど一理あると思ったのは週の半ばの水曜日。私——秦野未積^{はだの みづみ}は勤務先のビジネスタワーを出る前から駆け足だった。

雨の名残^{なごり}を振り切れずにいる都内の宵^{よい}は厚い雲の向こう側にあつて、夜空の気配をうやむやにしている。もはや何度確認したかわからない腕時計にもう一度視線を落とすと、短針が『7』を、長針が『10』を、それぞれ限りなく近い位置で指していた。

十九時は待ち合わせの時間。そしてタイムリミットをも意味する。

——急がないと。

職場から目的地まで徒歩で十五分はかかるから、走ってぎりぎり間に合うかどうかだ。赤煉瓦^{あかれんが}の駅舎を右に見ながら速度を上げて高架下に差し掛かる。アスファルトがうっすら波打つそこでも、ピンクベージュの九センチヒールはぐらつかず私の足を支えてくれた。

流石さすがに七十パーセントオフでも一万円を超えた上等品は質が違ふ。サイズがぴったり合う売れ残りにセールで出合えて本当に運が良かった。

しかし、できることなら下ろしたての靴で駆けるのは避けたかった。まだ裏張りにも行けていないし。定時ぎりぎりに仕事を回してきた上司を恨めしく思いつつ、私は先を急ぐ。

向かう先は出身高校の図書室だ。そこで彼が待っている。

もしもあの日の約束を覚えていてくれたなら。

「未積が恋愛できないのはさ、あれだ、テーマパークのアトラクションに付きものの、身長制限に引っかけたって乗れないのと同じ理屈。百四十五センチの背の低さが原因なんだよ」

高校卒業の晴れの日に幼馴染おきななじみがくれた饞別せんべつがわりの容赦ようしやない言葉は、惜別せきべつのあまり涙した式典よりずっと深く記憶に刻まれている。

「せめて百五十センチを超えれば勝機はある」

「勝機って……その理屈、私と同じ身長身長の母親が恋愛結婚してる時点で破綻はたんするんですけど」

そう言つたため息をついた私は、当時も肩までの長さのボブがトレードマークだった。あれは通つていた高校の図書室での出来事。特に背の高い書棚が配列された一角で、室内はしんと静まり返つていた。

私語は控えるように、との古い注意書きを書棚の脇に見つつ、声をひそめずに会話するのは少しだけ後ろめたくて、しかし気分がいい。

別れを惜しむ生徒たちがたむろする教室内と比べ、ひとけのないここでは沈黙すれば途端とたんに静寂せいじやくが耳を痛くする。高校生活の三年間、思い返せばいつもこの静寂が側にあつた。

「いやさ、一生恋愛できないかもしれないと思つより、身長が伸びれば恋ができるとしておいたほうが気が楽になるんじゃないかねえかと。親切で言つてやつてんのよ？」

いかにもしかつめらしく言われて呆れてしまふ。

「それは私の母親の体格をよく見てから言つてもらえないかなあ……私の身長が母の遺伝子に従つて、ここで止まる可能性は高いんだから」

言い返した私に、一瞬しまったと言いたげな顔をした彼、小石川椿こいしかわつばきはそのビビッドな名前通り、歌舞伎俳優のように印象に残る容貌ようぼうをしていた。

元野球部キャプテンという要素とも相まって女子生徒に学年問わず人気の椿が、この日、珍しく図書室にいたのは他でもない。第二ボタン争奪戦から逃げるためだ。私はというと学校の図書室もこれにて見納めだと思ひ、友人と別れたあとにひとりここに来て、ぼったり彼と出くわしてしまつたのだつた。

この日まで私は、椿がいかに濃厚な男性フェロモンを放とうと、一度たりとも彼を男として意識したことはなかった。どれだけ親切にされようとも、こうしてふたりきりで過ごそうとも。

家が隣土士の幼馴染おきななじみで、家族同然に育つた所為せゐなのかもしれない。しかし恋に発展しなかつた一

番の理由は、私が恋というものを知らなかったからだ。

原因なんてない。恋をしたくなかったわけでもない。

なのに、人を好きになる感情はいつだってもどかしいくらい、私の手には届かないところにあつた。背伸びをしてもぎりぎり掴めない書棚の最上段の本のように。

「牛乳でも飲めば。嘆くばかりでなく企業努力のようなものはあつてしかるべきだと俺は思うね」
にやにやと派手な顔を歪ませて笑う幼馴染を白目で見つつ、最後に借りていた十回目の『路傍の石』を書棚に戻す。好きな本は何度でも読みたくて、リピート借りをするのは私の習慣だった。

「そういうことはさんざん試してこれなの。牛乳嫌いのくせに百八十センチを超えてる椿が言つても説得力皆無だし」

「俺は毎日朝晩ヨーグルト食つてるし。飯を抜いても食つてるし。出されたものを素直に食うだけのお子様とは違うんだよ」

「小石川家のお母さまの苦労が今、垣間見えた気がする」

卒業後、大学の文学部への進学が決まっていた私は、これからも山ほど本が読めると踏んで嬉々としていた。今も昔も私の趣味は読書だ。どんな本でも読むと言いたいところだけれど、特に好きなのは古い本。

明治、大正、昭和のノスタルジックな香り漂う物語ばかりに心惹かれていた。

垂れ下がる髪を右耳にかけ、押さえた状態で体を屈める。ああ、この辺の棚も読みたかったな。

すると、タイトルを流して見ている私に気付いたのか、椿は机上にあぐらをかいて座り「何が面

白いかね、読書」とのたまう。

「それは椿にも聞きたいわ。何が面白いかね、野球。球を投げて打って追うだけじゃない」

「何おう。おまえは野球の何たるかがまるでわかつてないな」

容姿同様、プレイも目立つピッチャーだった椿は、学生野球のスカウトだか推薦だかで遠方の大学へ行くことが決まっていた。

五日後には引越して、四年間はまるまる寮暮らしになる。つまり私たちはこれでしばし、お隣さんではなくなるのだった。

「——なあ」

いつも通り能天気そうな椿の呼び掛けに、私は本のふちに人指し指をかけた状態で上の空の相槌を打つ。

「んー？」

「おまえさ、社会人になつてもそのまま身長百五十センチ以下で、恋愛ができないようなら俺もらつてやるよ。嫁に」

神経が本のほうにいつていたから、その台詞が頭に入ってきたのは数秒後だ。

言葉の意味が理解できないまま、本から指を外す余裕もなく頭だけで振り返る。そこに見た存外真面目な顔を、私は今でもはつきり思い出すことができる。

「嫁？」

と、おっしやいましたか。

「何だよその眉間の皺は。結婚してやってもいいよって言うてるの。大学を卒業してから一年、社会人経験を積んだあとにもう一回言うわ」

「は？ け、結婚って」

心臓が暴れ出したのは、ときめきというより戸惑いの所為だったと思う。

椿は机からひよいと飛び下り、何やら胸元を弄りつつ近づいてくる。動揺のあまり私は後ずさる。「や、ちよ、ちよと待ってよ。唐突すぎて、意味が」

「わからなくていいよ別に。ただ、離ればなれになつたあとで第三者にあつさり横から奪われたくねえし、おまえにその気がなくても、適齢期になって見合いでもされたらたまらねえから」

目前までやって来て、予約、と言いながら突如として突き出された拳にびくつかずにいられるわけがない。いったい何事だろう。それでも恐る恐る右の掌を見れば、そこには引きちぎった糸の残る第二ボタンがのせられた。

しゃりつ、と音を立てた銀色のボタンは空洞のようなのに妙な重さがあつて、私はぼかんとしてしまふ。これ、どうして。私に？ ううん、まさか。

「おまえさ、俺が本当に、野球に打ち込みたいからっていう理由だけでずっと彼女のひとりも作らずにいると思つた？」

椿はボタンを超越した無骨な右手を書棚のへりにかけ、やや前のめりの格好で私をほぼ真上から見下ろす。本と筋肉にサンドイッチされた私は気まずさに目をそらす。

「恋愛を前提にしなくても幸せにはなれるから安心しろ。俺がしてやるよ。実際、ウチの両親はお

見合い結婚で幸せにやってるし」

「つ、つば……」

「気心知れてるぶん、楽でいいと思っぜ。俺で手、打つとけば。なっ」

顔が近づいてくる。のっぺりとして特徴のない私の顔と比べ、ひとつひとつのパーツがはつきりしすぎるくらいはつきりした椿の顔が。

こんな状況には不慣れで、やめて、と言うこともできなかった。

「——っ」

さっきまでさんざん人をからかっておいて、そんなそぶりは一切見せなかつたくせに、突然豹変するなんて卑怯だ。

だいたい、いつからそんなふうに使ってたの。私たち、ずっといい友達だったよね。家族のような存在だったよね。

(違うの？ 椿にとつては、違ったの？)

瞼を伏せたビビッドな顔が容赦なく近づいてきて、私はますます体を硬くする。

すると唇が重なる一センチ手前まで来たところで、貸し出しカウンターの方角から、どんと太鼓を叩くような音がした。

椿は持ち前の反射神経を生かして瞬時に振り返る。その筋肉質な肩越しに私が見たのは、男性司書の姿だった。太鼓のような音はどうやら、彼がカウンターに本を置いた所為らしい。

「はい、そこ、おしまいです」

司書はこちらを指差して平坦な声で言う。

寝癖のついたばさばさの髪と無精髭だけでも充分むさくるしいのに、紐を結んで首に通したべつ甲色のふちの眼鏡をかけているのがより印象を野暮ったくしている。

年齢不詳の司書の名は殿谷——殿谷柱といった。

二年前の秋に突如、司書として学校にやって来た殿谷さんは、常に図書室内のどこかにいてなんとなく不気味な存在であることから、『ヌシ』と生徒たちに呼ばれていた。そう、沼とか山とかにいとされるあれだ。

しかし年中変わらぬ緩いカーディガンにシャツ、ベージュのチノパンという服装の影響か、あるいは細い体型の所為か、貫禄はまったくない。とはいえ身長は椿と変わらないくらい高いし、眼鏡の向こうからちらちら覗く顔立ちはさっぱりとして中性的で、磨けば光るだろうと私はぼんやり思っていた。

「小石川君、先程司書室に、女生徒からあなたを探しているとの連絡があったので、ここにいてと告げておきました」

一本調子なヌシの言葉。椿はうわつとこの世の終わりのような声を上げて逃げ腰になる。

「マジか。正直ってのは時に凶器ツスよ司書さん。空気読もうよ」

「図書室で不埒な行為に走る小石川君にこそ、それは空気を讀んでの行動なのかと問いたいです」

「……ちっ、じゃあ行くわ。また連絡する」

後退する格好で書棚から手を引き、その手を顔の横に上げてさよならの宣言をする椿。その驚く

べき変わり身の早さに、私はやはり焦る。

「ま、またって——」

「引っ越して、落ち着いたらメールでも出す。だから大学へ行っても早まって合コンなんて参加するなよ。じゃあな」

一方的に電話を切られたときの気分で、図書室から駆け出していく幼馴染の背中を見送るしかなかった。これが最後に見る学生服姿になるかもしれないというのに、余韻もへったくれもない。

こんなのはあんまりだ。馬鹿にしていたかと思えば突如プロポーズじみたことを言って、最後は置き去りだなんて恋愛小説の流れならブーイング間違いなしだと思っ。

でも椿なら仕方ないか、と嘆息して図書室を出ようとすると、ヌシが抑揚のない声で私を呼んだ。

「秦野未積さん」

彼からフルネームで呼ばれたのは初めてだった。

「先程の話、お受けになるんですか」

「え？」

「小石川君のプロポーズです。社会人になって一年たってもその身長のまま、恋ができなかったら彼の求婚を受け入れるつもりですか」

いつから聞いていたのだろう。廊下へと続く扉の手前で私はやむなく立ち止まる。

「それは……まだわかりませんけど。恋ができませんままでは困りますし、身長だってもっと伸びてほしいし、だいたい椿が生涯の伴侶になるとか想像がつかないです」

「なるほど。恋、してみたいですか」

「は、え？ はい。してみたいですけど、もちろん」

何かの調査だろうか？ 私に興味がある……わけではないだろう、当然。だって私はごくごく地味な小娘だし。珍しい特徴を持っているわけでもない。

混乱して眉をひそめる私の左後方に、彼はもう一度なるほど、と呟きながら歩み寄ってくる。

「でしたら小石川君の賭けに、僕も乗らせていただいでいいですか」

意味がわからなかった。

「か……け？ と、おっしゃいますと」

「ですから、秦野さんが二十四になる年になってもまだ恋愛未経験だったら、という話です。あなたは氣立てがいいから周囲が放っておかないと思います。ですから賭けです」

淡々と褒められたので、褒められた気はしなかったけれどきつと褒められたのだと思う。

「もしもそのとき、まだ恋がしたいと思っていて……なおかつ小石川君のプロポーズを受けるのは氣が進まないと思ったら」

殿谷さんはそこで眼鏡のふちを持ち上げてきつぱりと告げた。

「僕と恋の練習をしませんか」

「はあ……、え、はい!？」

ワンテンポ遅れて私は心の底から仰天した。前置きのなかった樁のプロポーズの数倍は驚いた。

何しろ殿谷さんは図書室のヌシであって、同じ学生としてともに教室で過ごしたわけでもなければ、

ば、図書室以外の場所で挨拶以上の言葉を交わした経験もほとんどない。そんな提案をする理由が彼にあるとは思えなかった。

「じよ、冗談はほどほどに……」

「学校関係者が冗談で女子高生に言い寄れると思いますか」

これ以上ないくらい説得力のある言い分だ。

返答に困っていると、廊下への引き戸が殿谷さんの手でがらりと閉ざされる。本日二度目の窮地に背中を嫌な汗が伝った。

「ちよ、その、じよ、冗談にしておいたほうがよいのではと」

「撤回はしません」

毅然とした口調に戸惑いながら言い返そうとすると、反論を封じるように言葉を継がれる。

「僕はあなたに恩を感じています。一生をかけても返しきれないだけの恩を」

「……恩？」

私に？ でも彼に恩を売った覚えなんてない。どういうこと……？

「ええ。あなたが恋がしたいと望まれるなら、僕は全身全霊をかけて叶えたいんです」

ですから、と言って彼は私に腕を伸ばし抱き寄せようとしたのだろうが、肩に触れる寸前でこらえるように拳を作って動作を止めた。衝動をぐっと抑え込んだように見えた。

「五年後の今日、午後七時にここで待っています。お越しくださいなくても、しつこく追ったりはしませんから、約束だけさせてください」

「ん？……？」

「はい。もしも相手が僕でいいと思われたなら、そのときは僕と恋の練習をしましょう」
穏やかな声で諭すように言われて、こくりと喉が鳴る。野暮ったくて貫禄がまるでないと思っ
いた殿谷さんに、完全に圧されてどぎまぎしている私がいいた。

「あなたさえよいと言ってくださるなら、落としかかります。どんな手を使ってもね」

それは練習と言えるのだろうか。全力で落とされたら、その恋は本物になってしまふのでは。
そう考えた瞬間、樫の告白には感じなかったときめきが私の心を微かに揺らした気がした。

その後——樫も殿谷さんも本気であんなことを言ったのか、それとも私はからかわれただけな
のか、考えれば考えるほどわからなかった。

いずれ別の人と恋をすればふたりとも私のことなんて忘れてしまふだろう、というのがふさわし
い解釈のようにも思えた。だって何もかもが唐突すぎて、いまいち信憑性に欠ける。

それがなぜ五年後の今、約束の時間に私が殿谷さんとの待ち合わせ場所を目指して全力疾走して
いるのかという……樫が先月あっさり、同僚の女の子と結婚してしまつたからなのだった。そう、
私の予想通り、樫は約束なんてどうの昔に忘れていたのだ。

大学入学以来、連絡のひとつもなかったからそんな可能性もあるだろうとわかつてはいたけれど、
それでもショックを受けずにはいらなかった。
しかし一番絶望したのは樫に対してではなくて、樫の言葉を疑いながらも、すっかり保険をかけ
たつもりで安心しきっていた自分自身に対してだ。恋がしたいと言いながら、私は結局あの日の約
束を拠り所にして、自ら好きな人を見つける努力をしてこなかった。
恋なんてしなくても、それなりの人生は送れるとたかをくくっていたのかもしれない。

くやしい。

本気で恋がしたい。

樫を見返せるような、とびっきりの恋がしたい——自分で一步を踏み出して。

思い当たる相手は殿谷さんしかいないけれど、彼を頼りつきりにして樫の二の舞になるのは嫌
だった。最終手段ではなくて、私は自分の意志で彼を選びたかった。思えば、これまでに出会った
どんな男性にも、あの日ほど心臓を落ち着かなくされたことはなかったから。

高校卒業以来まったく伸びていない身長百四十五センチ、プラス、ヒールの九センチ、イコール
百五十四センチ。

小さいままでは恋はできないと樫はあの日言ったけど、それなら上げ底してでも私は恋をする。

私は殿谷さんを選んで、殿谷さんと恋の練習をするんだ。

「殿谷さんっ」

叫んで図書室の扉を開く。学校側には昼間のうちに、夜にうかがうことを告げていたので、校舎
の入り口でもたつくこともなく、二分遅れでの到着となった。

狭い廊下の先にあった古い引き戸は、恐らくあの日と同じもの。じんわりと胸に懐かしさが広がる。室内は書棚の並びこそ変わったものの、広さも窓の位置も、照明の数も変わっていないかった。

「とのがや……さん？」

ふたたび呼び掛けるも、蛍光灯が煌煌と灯るそこに、見渡す限り人影はない。

もしかして彼も椿と同じように、私との約束なんて忘れてしまったのだろうか。それとも、最初から私をからかっただけだったの？

胸に広がる絶望感にただ立ち尽くし、私は今更のようにつま先の痛みを思い出して涙ぐむ。

——結局、あの日の出来事は幻だったのかな。上げ底の私では、恋なんて一生、手の届かないものなのかな。

すると、扉の右横の壁の奥からがたと騒がしい音がして、司書室のドアが突如全開になった。

「は、秦野さんっ!？」

現れたのは五年前と代わり映えない、ヨレヨレのシャツに着古したチノパン姿の殿谷さん。よほど焦ったのか、眼鏡が斜めになっている。

「あ」

当時に戻ったような気持ちで彼を指差した私は、次の瞬間、駆けて来た彼に抱き締められていた。想像していたより広い胸。ハイヒールを履いてもなお私たちの身長の違いは歴然で、彼は壁のごとく私から視界を奪ってしまう。

「え、あの、とのが……」

「よかつ……良かった、約束の時間を過ぎたから、もう、来てくれないものと。忘れられているもの……覚えていてくださったんですね」

殿谷さんこそ、ちゃんと覚えていてくれたんだ。嬉しくて涙が出そうになる。

「来てくれた、ということは僕でいいんですね。秦野さんに恋の練習をさせるのが、僕で」

「は、はい」

気の所為だろうか。殿谷さん、すごくいい匂いがする。シャンプーや洗剤とは違う、もっと温かくて優しい匂いだ。ほっとするのに緊張して、不思議な気分になる。

「でしたら、好みのタイプを教えてください。髪形も服装も、秦野さんが好きになれそうな外見に変えますから」

髪を撫でながら聞かれ、私は彼の胸で緊張したままかぶりを振る。

「そ、そのままがいいです」

好みのタイプなんてものが自分でわかるようなら、すでに恋はできているだろう。それに、私が選んだのは殿谷さんなのだから別人のようになる必要なんてない。

「でも、この状態ではあんまりでしょう」

あまりにも真面目な声で殿谷さんがそう言ったので、肩の力がほんの少し抜けた。訝えない自覚、あったんだな。

「本当にそのままでもいいです。椿はあの通り派手な外見のおかげで大学でもモテすぎて私のことなんてどうでもよくなったんだろうし、このうえ殿谷さんにまで浮気されたら嫌だから」

「浮……」

なぜだかそこで言葉を切って、殿谷さんは私の肩にへろっと額をのせる。

「……できるわけがないじゃないですか……最初からそういう可愛いのは、ナンですよ……」

ぼそぼそともった呟きとともにもう一度腕に力を込められ、私は息苦しさに身悶えてしまう。見かけより腕力があるということはよくわかった。だからもう許して。殿谷さんのベルトを握ってぐいぐい引くと、彼はやっと気付いた様子で私を解放し、優しい笑顔を見せた。

「では、最高の恋の練習、僕としましょう。全力で本気にさせてみせますよ。いいですね？」

「はい、もちろん。よろしくお願いします」

この人と恋をしてみせる。椿への悔しさもあつて、私は改めて決意する。受け身でいるのはもうやめた。今日を境に、私は一步を踏み出す。恋に積極的な自分になるんだ。

(でも、本気にさせられたらそれは練習ではなくなる気も……?)

ううん、今は深く考えずに飛び込んでみたい。

すると見つめ合った視線をそのままに、殿谷さんは口角を上げて言う。

「未積さん、……『月が綺麗ですね』」

「え」

彼の言葉にどきりとしないうけがなかった。

あまりにも有名なその台詞は、夏目漱石が言うところの『I love you』。

わざとだろうか。私が古い本を好きだから、それで？ もしかして私が高校時代に読んでいた本

のジャンル、きちんと覚えていてくれた……？

目を見開いた私の視界には、眼鏡の向こうでこの上なく優しげに細められた二重の瞳が映る。

五年前のどぎまぎ、とは違う、密かに心が揺らめくような感覚を覚えて戸惑ってしまう。

「月が、綺麗ですね……」

言いながら体を屈めた殿谷さんは、冴えない割に自然な動作で私のこめかみに唇を寄せる。

続けて目尻、頬、鼻先、そして、唇のすぐ右横に。

すれすれの位置へ優しく落とされたキスは、この恋が練習であることを暗に示しているように——心臓が爆発しそうになる反面、私はなぜだかとても焦れたいと思ってしまうかもしれない。だった。

2

「すみません未積さん、せつかくの日曜日なのに仕事だなんて」

「いえ、とんでもない。また図書室へ来られて嬉しいです。学生の頃、いちばん好きだった場所ですもん」

再会を果たした数日後、私たちが顔を合わせたのはまたもや高校の図書室だった。日当たりの悪い南校舎の三階、角にあるこの部屋の窓からは、申し訳程度に校庭の隅が見える。

正面の椅子に座る彼の向こうで、時折、白球を追って校庭を通り過ぎるのは野球部の外野だ。球を拾っては投げ、投げては拾って、汚れたユニフォームの奥から掛け声を絞り出す球児たち。その光景は懐かしくも、同時に何だかすがすがしくもあつた。

学生時代に感じていた閉塞感のようなもの、あれの正体はいつたい何だったのだろうか。……月並みだけど自立心？

そんなふうで過去を俯瞰していると、私の斜め前に歩いてきたセーラー服姿の眼鏡女子が言う。

「ねえねえ殿谷さん、コレも限界っぽくないですか？」

図書委員長である彼女がコレ、と言ったのは、腕に抱えたボロボロの蔵書に対してだった。

本日、図書室は半年に一回の蔵書の入れ替えの日にあたるらしい。

殿谷さんは普段、貸し出しの多い本をこつこつと修復しているそうなのだけれど、棚に入ったきりの本まではなかなか目が行き届かないため、図書委員の手を借りて古い本を引っ張り出し、廃棄にするか修復するかを決めるのだそうだ。

「ああ、ありがとうございます。そこに置いてください」

殿谷さんがそう言つて机の上を示すと、彼女は分厚い本を置きながら私をちらと見て、また書棚のほうへと戻つて行つた。そちらには同じ制服姿の女の子が三人ほど立っていて、合流するなりキャーと甲高い声を上げる。殿谷さんに対してじゃない。私たちふたりに対してだ。

ここへやつて来て五分、どうやら私はすっかりヌシのカノジョ認定をされてしまったみたいだった。あながち間違ではないのだけれど、付き合っている、とするのは時期尚早だ。恋の練習をす

ることになつても、片想いさえできていないのにいきなり両想いはハードルが高い。少しずつ前進していききたいのだ。

気まづい気持ちで古い文庫本のカバーを外していると、殿谷さんつてもういい歳だよ、結婚するのかな、なんて会話が耳に入ってきてますますいたたまれなくなる。

(うーん、やっぱり外で待ち合わせるべきだったかも……)

せっかくだから手伝いに行きますよ！ なんて張り切るべきところじゃなかったな、ここは。

苦笑して、私は目の前にある、日焼けした単行本をパラパラと捲る。

「あのお殿谷さん、これ本当に廃棄しちゃうんですか？ 初版ですし、絶版本ですよ。価値がありそうなのに」

私の問いに、殿谷さんは大型本から貸し出しカードの入れ物を剥がしつつこり笑つた。コンピュータでの貸し出し管理が当たり前の今、昔ながらの方式で本の貸し出しを続けていることはレトロでいいなあ、と思う。

「僕も残念ですよ。しかし売って儲けるわけにもいきませんし、図書室は常に新しい情報を提供するの役目のひとつですから、割り切らないと」

彼は本日もカーディガンにシャツという緩い格好だ。が、シャツはいつもよりパリッとしている。わざわざデートのためにアイロンをかけてくれたと思つてもいいんだろうか。

「……ですよ。でも私、こういう、もう市場には出回っていないような本こそ、図書室にあつてほしいと思うんです」

図書室や図書館は、店頭から消えてしまった古い本をもなく保護する場所であってくれたらいいのに。不可能だとわかっていてもそう思う。幼い頃に何度も読んで、納得して手放した本でも、また読み返したくなることがある。けれど絶版になってしまうと普通の本屋さんはもちろん、ネット書店でも手に入らないことがままあって、そんなときどれだけ図書館に救われたかもしれない。

「昔からそうですね、未積さんは」

彼は手元の仕事をあらかた終えたようで、席を立ち、積み上げた本を持ち上げた。

「私、学生の頃に同じ主張、殿谷さんに行きました？」

追いかけるようにして立ち上がると、私は彼をまねて古い本のタワーをひとつ抱える。どうやらこれらは司書室へ移動させるらしい。すっかりお手伝いしなければ。

「いえ、そうではないですけど。未積さんはいつも古い本を大切に読んで読みますし、きつと考えがあるんだらうなと思ってたんです」

「よく見てましたね……」

司書ってそこまで借り手のことを見ているものなんだろうか。仕事熱心なのかな、と思いながら彼の背を追って歩き出したところで、

「ええ、ずっと見てましたよ？」

顔だけで振り返った彼が眼鏡越しに目を細めたから、どきつとしてしまった。

見ていた——ずっとどれくらい？ 司書としてこの学校にやって来た直後から？

そういえば殿谷さんは私に恩を感じている、と五年前のあの日に言っていたけれど、あれはいっ

たいということだったのだろう。恩返しのためだけに恋をさせると言っているのなら、私をずっと見ていた理由もそれ？

——殿谷さん、何を考えてるの……？

落ち着かない気持ちで司書室に向かえば、私たちを追って女の子たちがパタパタと駆けて来た。

「あの、お仕事が終わったところでおふたりの馴れ初めとか聞きたいんですけどっ」

かしましい声で持ち掛けられるのは恋の話だ。気になる年頃なんだろうな、と微笑ましくなる。

そんなことを思うなんて、私は若干年をとったのかも知れない。

しかし殿谷さんは慣れた様子で意味深に笑って、お開きですよ、と彼女たちの質問を二蹴してしまった。

確かに私たちの関係は曖昧すぎて、誰かに打ち明けるのは難しい。

ましてや女子高生の耳に入れたら噂が広まるのはあつという間だろうと思う。

けれど、冗談でも少しくらいノロケてくれるかもしれない、なんて心の片隅で期待してしまった理由は……自分でよくわからない。

夕飯には少し早いですが食事でもしましょうか、と彼に誘われて校舎を出たのは午後五時過ぎだ。空はまだ明るく、午前中より風が強い。グラウンドを抜けてきた風に髪を大きく煽られ、このまま

では毛先を食べる羽目になりかねないと髪をクリップでひとつにまとめた。

「さっぱりした髪形も似合いますね。可愛いです」

すかさずそう言ってくれる殿谷さんは、案外女性慣れしているのかもしれない。

「か、かわ……サラッと褒めますね……」

しかし私は、上手く返答することができず照れてしまう。なにしろ肩までの長さで内巻きにカールさせたボブは、高校時代から変わらない私のトレードマークだ。束ねたくらいで褒められたことなど過去にはなかったから、余計に。

「思ったことを言ったままでですけど。爽やかですごく可愛いですよ」

不思議そうに返事をして、私をじつと見下ろしてくる黒目の大きな瞳。見つめ返す余裕もない。学校から駅までの道のりは高校生のときに何度も通った場所だけれど、彼とふたりで歩くとまるで別の場所みたいに新鮮だった。

「や、あの、恋に落とすためとはいえ過剰なお世辞はいらないので……」

「お世辞ではなくて——いえ、そうですね、未積さんは褒められて簡単にその気になるような性格ではありませんでしたね」

なぜ知っているのだろう。

小さい頃から私はどうにも『その気になる』のが難しいほうだった。体育会系のノリが苦手というか、熱中しても火がつかないというか、だから恋ができないのかもしれないのかもしれない。

悪い癖だとわかっているけれど治し方がわからない。もっと単純にドキドキしたりワクワクしたり

りしたいのに、当たり前の感情がどうして湧かないのだろう。

だから過去には何度か、私は恋心なんて持っていない欠落した人間なのかも、なんて落ち込んだりもしたっけ。

「もうちょっとおだてに乗りやすい人間なら扱いやすかったですよね、きつと」

「いいえ、簡単に他の誰かに流されるようなら僕の未積さんではありませんから」
僕の。

そう断定しながら穏やかに微笑まれて、思わず目をそらしてしまった。少々の甘言には揺るがな
いはずなのに、彼の言葉はとても丁寧で胸にすんと入ってくる感じがするからときどき焦る。

……ううん、どうして焦るんだろう。

自分でも謎だ。

そうして徒歩で移動した先は駅前のタワービルだった。私が高校在学中はまだ建設中だったこのビルは、半年ほど前によくオープンしてから毎日大勢のお客さんで賑わう人気スポット。とはいえ、あまりにカップルが多いので足を踏み入れにくいなと思っていた場所でもあった。

いつの間にも予約を入れていたのか、十一階のイタリアンレストランに辿り着くとスムーズにリ
ザーブ席へ案内される。窓際の、丸いテーブル席だった。

「未積さんは今、化粧品会社にお勤めなんですよね？」

向かい合って座ると、彼はメニューを捲りながらそう尋ねてくる。

男性とふたりきりで食事だなんて私は緊張が隠しきれない状態なのに、殿谷さんはなんとなく余

裕があるように見える。

「はい。姉の影響で……あ、実はその勤務先、最寄り駅が学校と一緒なんです」

「へえ。ならば仕事のあとにもデートできますね。しかし、少々意外です。未積さんはつきり書籍関連のお仕事をなさりたいのかと思っていました」

テーブルは壁のようになった窓に寄せてあり、私の位置からは向かいにデパート、眼下に駅を見下ろせる。夕食にはまだ早い午後五時半、周囲の席はちらほらとしか埋まっていない。

ビルに入ってからというもの、話題は会っていないかった五年間のことになっていて、特に彼は私の話を積極的に聞きたがった。

「そうですね、私はもちろん書籍の編集が第一希望だったんですけど、なかなか難しく。編集プロダクションも受けたものの、引つ掛からなかったんです。今勤めているところは、姉が優秀なおかげもあって拾ってもらえたのかも」

「お姉さまと同じ勤務先なんです」

「そうですね。ふふ」

約束をした日から五年、現在私は中規模な化粧品会社の事務として働いていた。

いつかは本に携わる仕事をしてみたいけれど、まずは安定。今が暮らせなければ夢なんて追えない——と、厄介な現実主義が就職活動の半ばで私に舵を切らせたのだった。

「そうですね。ぐんと大人っぽくなられたのは、化粧品の使い方を覚えられたからなのかもしれませんね。他の男の所為ではなさそう、安心しました」

「また、そういう台詞を臆面もなく……」

笑顔でかわそうとしたけれど、優しい視線の返り討ちにあう。ずっと見ていた、という言葉を出して狼狽うろたえてしまった。あれ、本当にどういう意味だったのだろう。

「……見すぎです、殿谷さん」

「やっと盗み見しなくてもいい身分になれたんですから、存分に見せてください」

そんなことを言われても。戸惑いながら私は頭の片隅で思う。

眼鏡越しの優しそうな目、あそこには私がどんなふう映っているのかな。

ぐんと大人っぽくなった、って褒め言葉だよ？ でも私、今日は仕事の日と同じメイクだ。少しは気合いを入れればよかった。ああ、髪、下ろしたままのほうが顔を隠せたのに。

——いつもより後悔の数が多いのは、どうして……？

困惑のあまりメニュー表を顔の前に立ててそこに隠れてみる。文句のひとつでも言われるかと思いきや、彼は愉快ゆかいそうにくすりと小さく笑ったあと、ウェイターを呼んで料理の注文を始めた。

ウェイターの前で、これとこれはどちらにしますか？ などと写真を示しながら問われては応じないわけにはいかない。それでバリケードはあっさりと、私の前から取り払われてしまったのだった。

殿谷さんは案外、策士だ。

メインディッシュが運ばれてきた頃、私は質問に答えるばかりではいられなくなって尋ねた。

「殿谷さんはどうしてたんですか、この五年間。……と、いうより私、殿谷さんのこと、何も知らないです。年齢も、血液型も、趣味も、司書になる前に何をしてたのかとかも。次は私が質問する番ですよ」

「僕の過去に面白いところなんてひとつもありませんよ」

「氣まずそうに笑って、べっ甲色の眼鏡の位置を直す彼。左手の親指と中指で、眼鏡のふちを左右同時に持ち上げる動作は、丁寧^{ていねい}でもとてもいい。

「面白いかどうかは問題じゃないです。これから恋しようっていう相手のこと、何も知らずにいるのが問題なんです」

「確かに」

殿谷さんのフォークを持つ手は角張っている、とても表現したらいいんだろうか。深爪^{ぎみ}気味の指先はほんの少し荒れていて、紙を扱う仕事ならではの苦勞を滲^{にじ}ませているところが何だか色っぽい。迷った様子で目を泳がせた彼は、覚悟を決めたようにこちらを見て話し出す。

「僕は現在三十五歳のA型です。あなたに出会うまで、数年ほど引きこもってました。ひとり暮らしの部屋に」

「え」

「生活費は、デイトレードとスマートフォン用のアプリケーション開発でいくらか。当時はけっこう儲^{もち}かったんですけどね、アプリ。最近は無料のものが回りすぎていていけません。だから趣味はパソコンでしようか」

暗くて引きました？ と自嘲^{じちやう}気味^{きみ}に尋ねられて慌ててかぶりを振った。私はあまりパソコンには詳しくないから、そんなことができるなんて尊敬してしまふ。

「それで、どうして司書になられたんですか？」

流れに乗った質問だと思ったのだけれど、彼はふつと表情に影を落として黙ってしまふ。

「殿谷さん？」

「……当時、学校関係者だった親切な友人がどうしても。おまえはもつと人と関われと強引に部屋から連れ出されました。もちろん乗り気ではありませんでした。人が……中でも若い人が、僕はどうにも苦手で。いもうとと同じような年齢の子は、特に」

「妹さんがいらっしやるんですか」
意外だ。

「はい。一応」

パスタをすくいながら殿谷さんはぼそぼそ言う。

しかし人が苦手ということは、それが理由で引きこもっていたのだろうか。あるいは、他に引き金になる出来事でもあったとか？ 妹さんと同じくらいの年齢の子が苦手だなんて、どうして？

本当は知りたくてたまらないことばかりだったけれど、彼の複雑そうな表情を前にしては、なぜ、と簡単には聞けなくなる。

「僕は一生引きこもりでいいと思ってたんです。ひとりなら誰に合わせる必要もありませんから。……ですが最初に図書室へ案内されると、あなたに出会った」

「私……？」

「未積さんは覚えていないでしょうが、背中を丸めて歩くのはやめると友人に文句を言われていた僕にあなたは言ったんです。『猫背は句になりませんよ』と」

「え」

私は見ず知らずの人間に何たる無礼な言葉を。いや、句——□元に連ぼうとしていたクリーム pasta 付きのフォークが止まる。それに似た台詞セリフを何かの小説で読んだような……目を泳がせる私に、殿谷さんは懐かしそうに言い添えた。

「山本有三やまもとゆうじの『波』にそんな言い回しがありましたよね。好きな小説だったので、すぐにピンとききました。と同時に、ずいぶん真面目な学生がいるものだなと興味を持ちまして」

「……ああ、『波』！ そっういえばそんなこと、言ったような気が」

してきた。ぼんやりと思い出したのは、古典の佐野さの先生が廊下で誰かに、そういう姿勢は不健康そうだのモチないだのとガミガミ説教している場面だった。彼らの後を歩いていた私はその説教されている誰かに不注意で追突してしまい、ごめんなさいと詫わびながら、ついぼろりと言ってしまったのだ。以前、小説で読んだ、猫背に対する苦言を。

『猫背は句になりませんよ』

だって間近で見たその人は……ずれたぶ厚い眼鏡の向こうから覗いた素顔は、胸を張らないのが勿体もったいなくらい素敵に見えたから。

じゃあ、殿谷さんの友人って佐野先生だったのか。というより、あの人、殿谷さんだったのか。

ものすごく綺麗な人とぶつかったイメージがあったから、別の人だと思っていた。

「あときの僕に必要だったのはきつかけです。長く絶っていた社会との繋つながりを取り戻そうという意欲は『なんとなく』では湧きません。友人が主張するような、ごもつともな大義名分は否定し尽くしたあとだった。そこへきて『句にならない』という一言がどれだけ劇的に聞こえたか」

彼はおもむろにフォークを置き、背筋を伸ばして居住まいを正すと、トマトソースの pasta にオデコから突っ込んでしまうのではないかと心配になるほど深く頭こぶを垂れた。

「僕の社会復帰が叶ったのは未積さんのおかげです。あなたが僕の目を覚まさせてくれたんです。どんなにお礼を言っても言い足りないほど感謝しています」

そう言って顔を上げた殿谷さんは、想像以上に真面目な目をしている。視線がぶつかった途端とたん、肩が跳ねてしまった。

「じゃ、その、五年前に言ってた『恩』っていうのは」

「ええ。通りすがりでくれたその一言と、それから、図書室に休みなく通い続けてくれたことです」

私の手元を見て、殿谷さんは右手にフォークを握り直して口角を上げる。

「決意したとはいえ、勤め出した当初は人の多さに吐き気がして……何度も逃げ出そうと思いましたが、でも、あなたが顔を見せてくださるとわかっていたから。あなたに会えるから耐えられたんです」

そんなふうかと思っていてくれたなんて知らなかった。しかし、いったい何があって引きこもりに

なったのか疑問になる。人が多いだけで吐き気がするなんて、単なる人嫌いとは思えない。

「……加えて告白しますと、あなたが返却した本はときどき棚に戻す前に僕も読んでいました。あなたが捲ったページを捲っていると思うと、なぜだかとても落ち着くので」

立派なストーカーですよ、すみません、と申し訳なさそうに詫言ひる殿谷さんに、私は顔の前で左手をぶんぶん振った。これが椿なら引いたに違いないけれど、不思議と嫌悪感（けんおかん）は抱かなかった。

「その、古い本ばかりで退屈（たいくつ）しませんでした？」

「まさか。もともと古い本は好きでしたし。ほら、昔の純文学（じゆんぶんがく）って朴訥（ぼくたく）で、言葉の隅（すみ）つこが琴線（きんせん）に触れる感じがしませんか。あれが心地よくていいんですよね」

「わかります！ 気持ち引掛（ひか）かって惹かれる感じ、わかります。私もずっとそう思いながら読んでました」

こういう感覚は昔の本ならではなあ、って。

同じ思いを共有していたのだと思うと単純に嬉しくて、わくわくする。大学の文学部でも本好きの男子生徒はいたけれど、感覚まで共有できた経験はなかったから、なおさら。

「……だろいな、と思っただけ」

答えた彼は、優しく笑って言う。

「未積さんはきつと、僕と同じなんです」

「殿谷さんと同じ……？」

「ええ。あの日、あなたが恋をできないのは身長が足りないからだと小石川君は言っていました、

僕はそのようではないと思います。自分を動かす言葉をたまたま周囲に見つけられなかっただけ。周囲の男があなたの琴線（きんせん）に触れる言葉を囁（ささや）けなかつただけ。それだけのことなんです」

その言葉はまっすぐ私の心に入ってきて、じんわりと温かく沁（しみ）みだ。

恋がでなかつたのは、たまたま……なんて優しいことを言ってくれるんだろう。

これまでにないくらい胸が高鳴って、頬（ほ）がかあつと熱くなり狼狽（ろうたい）してしまう。何、これ。私は視線（しせん）を泳がせ、店内を振り返って必死に動揺（どうご）をごまかそうとした。こんな気持ちになったの、初めてだ。すると店の入り口にいるお客さんを見つけたところで、ぎくりと固まる。

「あれ、未積じゃん！」

目が合った瞬間、彼は見覚えのあるビビッドな顔をぱつと明るくして声を上げる。そうして傍（かたわ）らにいる女性（おんな）を気遣（きせ）いつつ、大胆にも店内を突っ切（き）って近付（き）いてきた。

「おまえもデート？ つうか、アレ、もしかしてそっちはヌシ？ ちょ、おまえらそういうこと？ いつから!？」

「……椿」

どうしてここに。

後ろめたいことなんてないのに、心臓（しんざう）がどくどくと脈（み）を打ち、嫌（きら）な汗（あせ）が滲（にじ）む。

結婚後、椿（つばき）の実家（じけ）で家族（かぞ）と同居（どうきゆう）を始めた彼（かれ）らとは、お隣（おとなり）さんとはいえほとんど顔を合わせることはなかつた。ううん。私のほうからなるべく、会（あ）わないようにしていたのに。

コクリと息（いき）を呑（の）んでしまう。そんな私（わたし）を殿谷（たにや）さんはほんの少し鋭（えい）い目で見て、それから白々（びやくやく）しい

くらい柔らかい笑みを浮かべ、椿に声を掛けた。
「お久しぶりです、小石川君。お元気そうですね」

店員さんが丸いテーブルをふたつをくつつけて雪だるま形にしてくれたこの席は、ともすれば外周が無限度のマークにも見える。ああ、この妙な宴、いつまでも終わらないんじゃないかな……、とうんざりしながら流した視線の先には、興味津々で質問を繰り返す椿の姿。

「なあ、もしかして在学中からそういう仲だった？ 禁断の関係？ すげーな、やけにしよっちゃう図書室へ行くと思つてたけど、こういうことか！」

「ちよつと椿、推測で話を進めないでよ。殿谷さんと私は別に」

在学中は何もなかったし、と真実を語ろうとしたのに、殿谷さんにまあまあ、と止められる。

「いいじゃないですか、今更」

「でもこのままじゃ、殿谷さんが妙な誤解を受けますよ」

「誤解？ いえ、生半可な気持ちで手を出したわけではありませんから」

なぜそんなに意味深な返答をするんだろう。手なんて出された覚えはないし、だから生半可も何もないのに。

しかし椿が楽しげに質問すればするほど、殿谷さんは危うい回答ばかりを口にして私の肝を冷や

してくれる。まるであの頃からずっと、私たちの間には椿の入り込む隙などなかったとばかりに。

居心地の悪さにふらと泳がせた視線は、私の右隣で微笑みを浮かべた奥さまをちらと捉える。椿と向き合つて席についている黒髪ロングの清楚な彼女は、椿が人生のパートナーとして選んだ人。私のことなどそつちのけで愛した人。

言うなればあちらが勝者で、こちらは敗者だ。まともに恋もできていないことを思うと、なおさら惨めだった。

幸せそうな彼女と目を合わせる勇氣はなくて、私は憂鬱なテーブル上に視線を落とす。

(なるほど、こういうことか……)

椿に恋愛感情があるわけでもないのに、どうして椿たち夫婦に会いたくなくなつたのか、わかつた気がする。こんなに情けない気持ちになるなら会いたくなくて当然だ。

すると私の視線を引き戻すように、殿谷さんがメニューを差し出してくる。

「飲み物、追加しますか？」

優しい声にほつとした。

「じゃああの、烏龍茶を」

「わかりました。学生の頃も自販機で買うのはいつも烏龍茶でしたよね、未積さんは」

その通りだ。紙パックの烏龍茶、図書室の脇の自販機でしょつちゅう買っていた。そんなところまで見られていたなんて。直前までの重い気分を忘れて照れる私を見て、椿は斜め前で驚いた顔をする。

「はー、未積に恋する乙女の顔をさせるとは、ヌシ、只者じゃないっすね」
「いいえ、ただの司書ですよ」

笑顔で答えた殿谷さんはウェイターに烏龍茶を注文すると、なぜか腰を浮かせて椅子に座り直す。と、ピンクベージュのハイヒールの右のつま先に何か当たった。誰かの足だ。偶然かと思いきや、それがやけにゆったりとむき出しの右足の甲を撫で始めたので、慌てて足を引く。けれど逃げ切れなかった。

「しっかし、それならそうと言ってくれよ。俺、卒業式の日にはエライ恥かいたじゃん」

椿がブツブツと文句のようなものをこぼす中、私は足の甲を左右に掠め続ける微かな感触に、ほとんどの神経を持つていかれていた。これは……わざと撫でられている？

「あのときさ、タイミングよくヌシが登場したのってこういう理由だろ。もしかして待ち合わせでもしてた？ 恋ができないなんて言ってたのも、ヌシとの禁断の関係を悟られないようにするためのカムフラージュ？」

誰が何をしているのかは、殿谷さんの口元に浮かぶ意味深な笑みを見れば明らかだった。つま先での密かな戯れ……いったいなぜ今、こんなこと。

「小石川君は勘がいいですね。そうです。卒業式の日、僕たちは図書室で会う予定でした」

しれっと嘘を言った彼は、その間もつま先で私の足を撫で続けていた。甲をくすぐったかと思うとすねまで逆撫でされて、肩が跳ねそうになる。

——卒業式の日、殿谷さんと待ち合わせなんてしていない。だから椿のプロポーズだって真剣

に受け止めたのに。

なのに、反論のひとつもさせてもらえない。テーブルの下での密かな愛撫は強引で、まるで何も言わずに、当時からこの関係を肯定しろとでも言っているかのようだ。

「素敵ですね、禁断の恋……」

奥さままでもがキラキラした目でこちらを見る。肩が跳ねそうになるのを我慢して笑い返すと、椿が身を乗り出して会話に割り込んだ。

「でさ、未積はヌシのどこに惚れたんだ？ やっぱり本の知識か？」

「……う、うん」

顔くので精一杯だった。靴をそつと脱がされて、足の裏にまで触れられてはもう平常心なんて保てない。だから私はいつの間にか、椿たち夫婦に対してのモヤモヤした気持ちなど、どこかへ飛ばしてしまっていた。

触れられているのは足なのに、どうして体の奥が熱くなるのだろう。

ぼうっとして、殿谷さんのことしか考えられない。徐々に頬に熱を感じ始めた私を見て、殿谷さんは納得した様子で椿と奥さまの会話を遮った。

「未積さん、そろそろ行きましようか」

「……え」

「ご夫婦のデートをこれ以上邪魔しても申し訳ないですし、僕たちはもう一軒の店の予約時間がありますから、行きましよう」

もう一軒予約してあるなんて聞いていない。それに、追加注文した烏龍茶がまだ届いていない。しかし殿谷さんはすつとしゃがみ込んで私に靴を履かせると、目だけが笑っていない笑顔で締めくくってしまう。

「では、僕たちはこれで失礼します」

彼は丁寧に一礼し、私の手を引いた。肩越しに見えた顔は、もう充分だとも言いたげだった。

わけがわからないながらも着いて行くと、無言のまま強引に食事代を奢られて焦ってしまった。

「あの、殿谷さん、もう一軒の予約というのは」

「嘘に決まっているじゃないですか」

即答だ。声色から殿谷さんの機嫌の悪さがはつきり伝わってきて、私は店を出てエレベーターホールへ辿り着いたところで、慌てて小さく頭を下げる。

「ごちそうさまでした。ありがとうございます。それと……すみません、椿が失礼なことを」

きつと会話の途中で何か気に障ることがあったのだと思った。彼は悄然としながらも口角だけを上げ、恐らく笑おうとしたのだろうが、笑えずに目をそらす。

「なぜ小石川君の行動をあなたが代わりに謝罪するんですか。やはり、そういうことでしょうか」

「そういうこと、って」

「未積さんは妬かせるのがお上手です。こればかりは練習の必要などなさそうですね」

ばし、とエレベーターのボタンを押した彼の仕草には、なんとなく憤りが見てとれる。

さらに機嫌を損ねてしまったみたいだ。どうしよう。

「すみません、あの……」

「謝るといふことは心当たりがありますか。まあ、あれだけあからさまに小石川君を気にする態度を見せておいて、ない、とは言えないでしょうが」

気の所為か殿谷さんの口調は店内にいたときより速い。

こんな流れに流暢に喋る人だっただろうか。はらはらしながらも疑問に思っていると、エレベーターの上のランプが点滅し、機械音とともに扉が開いて空っぽな空間が現れた。

途端、左手首を掴まれ、ぐんと引かれる。声を上げるところか何を考える間もなくエレベーター内に連れ込まれ、はっとしたときそこは密室になっていた。

押された行き先ボタンは最上階、現在の階層を示すランプはぐんぐん数字を大きくしていく。

「殿谷……さん？」

どこへ向かう気なの。この上はオフィスと、それからホテルしかなかったはず。

「僕は消去法で残ったほう、でしたか。わかつてはいましたが、改めてこの目で確認させられるとこたえますね」

不機嫌そうな声とともに左手首により強い力が込められる。操作パネルのほうを向いていた彼は背後にいた私を振り返るなり、じりりと迫って壁際へと後ずさりさせる。たった一半で、私の腰の後ろにはトンと手摺がぶつかった。

「恋、できていたのでしょうか。小石川君の奥様を一度も直視なさいませんでしたね。小石川君と結

婚できることを夢見ていたのに、あんなふうには裏切られたから、彼を忘れるために致し方なく、あるいは自棄になって僕のところへ来ましたか」

滔々と流れ出る棘のような言葉たち。まさか、椿を好きだったと思われる？

「違います！ 椿は単なるお隣さんで、幼馴染で、それだけで」

「へえ。幼馴染というのは、各々の失礼も自分のことのように詫びるんですね。一心同体ですか、羨ましいです」

わざとらしく淡い声で左耳に囁いてくる口元には、冷たい笑みが浮かんでいる。薄い唇の表面に見える艶が、私の心臓を落ち着かなくさせる。

「ほ、本当に、私、椿のことは何とも思っていないです」

「ムキになって否定しなくても結構ですよ。本心がどうあれ、あなたが選んだのはこの僕です。恋をさせてもいいと許可したことは撤回させない。今更嫌だと言われても逃しはしませんから」

顔の横で両手首を捕らえ、腿の間に膝を入れて、私の動きを完全に封じたところで彼の唇が顔の間近に寄せられた。

「五年も待つなんて酔狂だと思わないでくださいね」

「と、のが……やさ」

「学生服姿のあなたに触れたらめちやくちやにしそうだったから——冷静になる期間を置いたんですよ、これでも」

互いの上唇の表面が微かに触れている。未遂と言えない気がする。……これ以上はしないよね？

「あのっ、練習……です、よね」

「ええ、練習です。が、練習以上のことはしないとは言っていないません」

そんな。まさか殿谷さん、最初からそのつもりで。ううん、彼を選んだのは私だ。

「僕のような男に捕まってしまって運がなかったですね」

自虐的な言葉とともに、唇をそっと押し付けられたのは右耳だ。突然の口づけに体を硬くするも、唇は容赦なく何度か角度を変えてそこにあてがわれた。ついでといったふうに、ぺろりと下唇のすぐ下を舐められて、震えてしまう。

「……っ」

胸の奥から湧いてくる、この気持ちは何だろう。先程足をくすぐられたときにも微かに感じていた、恐ろしくて逃げ出したいような、もう少しこうしていたいような、自分で自分を見失いそうになる、危うい感覚……

「僕はね、未積さん。あなたが思うよりずっと——」

エレベーターが最上階で扉を開けたのはそのときだ。

焦る私を横目に、半分ほど開いた扉はすぐに閉じてふたたび密室に逆戻りする。どうやら彼が、

私の体の横にあるボタン——『閉』と『1』を素早く押したようだった。

緩やかに降下を始めた空間の中、再開される行為は先程と同じ、ギリギリのところ唇を奪おうとはしない擬似的なもの。

顎の上でチュ、つと音を立てられて混乱がピークに達する。顔を背けようとすると、後頭部に左

手を添えられて阻まれた。下唇の際を右から左へなぞる舌。顎先を甘噛みした歯はこもった熱を伝えながら喉元へ下る。

「ん、ツ……や、と、とのが、っ……」

これはキス？ キスでないなら、殿谷さんは何をしているの？ 練習？ 何の……練習？

「……これ以上、深く探られたくないなら黙って」

「でも」

「その上擦った甘い声で呼ばれると、理性が弾けそうになるんですよ。もう、限界……」

こちらこそ、鼻すじを掠める柔らかな前髪に限界だと思った。膝の感覚が遠い。両手が震える。すると右の顎の付け根に唇を押し当てられたところで、ふと、後頭部に触れる彼の左手が酷く冷たいことに気付く。気の所為でなければ左手首を拘束しているほうの手も冷たい。間近に見える顔色も……いいとは到底言えなかった。

ここへやって来たときよりずっと血の気が薄い。限界という言葉は比喻でも何でもないみたいだ。事態の深刻さに気付いた私の右前方、彼の頼りない肩越しにエレベーターのドアが開く。

一階に着いたのだ。

「……行ってください」

殿谷さんは強引な拘束から一転、真つ青な顔で私を解放し空間の外へ押し出してしまう。自らはエレベーターの内側にいながら、まるで私を檻の外へ逃がすように。

「い、行くって」

「今日の練習はおしまいです。このままでは練習では済まなくなります。離れたほうが身のためですよ。……そんな顔をしなしてください。またすぐに連絡します。ですから今のところは」

「でも」

ひとりで置き去りにしていい状態には見えない。ゆるゆると首を左右に振って一步距離を詰める、力なく口角を上げて言われる。

「……あなたの本心はわかりましたから。どうか、これ以上惨めにさせないでください」

本心。それは私が椿を忘れられずに、次の恋がしたくて殿谷さんを頼ったとかいう、的を外れな想像のことを言っているに違いない。

違う。私はかぶりを振り続け、もう一步彼に近づく。誤解されたままでは嫌だと痛切に思った。

「行って、未積さん」

鬼気迫る声とともに殿谷さんの左手がボタンに伸びる。目の前で閉まり始める重い扉は、危機感からかスローモーションに見える。

まるで彼の心ごとそうして閉じられてしまいそうで、あまりにも寂しかった。すぐに連絡すると言われたのに、このまま二度と会えなくなるような――

そう感じたなら、足が勝手に動いて、衝動的にエレベーターの中に飛び込んでいた。

ピンクベージュのハイヒールが右足から脱げ落ちるのもかまわずに。

「い、行けるわけがないじゃないですか！」

三たびでき上がった密室内、呆然とする彼の両腕に掴み掛かりながら私は訴える。

どうか誤解を解きたくて、彼の顔色が心配で、何よりまだ離れたくなくて、胸の中はぐちゃぐちゃだった。

「椿を男として意識したことなんてない。私が選んだのは殿谷さんです。殿谷さんです……っ」
あなたと恋がしたいと思った。その気持ちに嘘はない。

すると両手を掴み返される。突き当たりの鏡に背を押し付けられ、全身で覆い被さられる。目の前が一瞬にして真つ暗になり、こうして、少し乱暴に唇は重なったのだった。

「ッ……ん……」
ファーストキスだった。

頭の中まで掻き混ぜるような舌の動きに翻弄されて、相手が殿谷さんであることだけしかわからなくなる。

「……きです。好きです、未積さん……好きだ……誰にも渡したくない」

息継ぎの合間に繰り返し聞こえたのは淡く連なる告白の言葉。その告白は練習？ このキスは……どう捉えたらいいの？ 考えたいけれど、頭がぼうつとしてできない。

「嫌なら……僕の唇を噛むなりしてください。忘れたいなら、単なる練習だと思って、流して」

単なる練習……やっぱり練習なんだ。でも、流すなんて無理だ。忘れられるわけがない。こんな情熱的なファーストキス。

「う、……ッあ、で、きな……」

「……ならもつと、奥へいれて。唇、開いて……もつと」

不思議と口の中が甘い気がする。甘くて、熱い。

「もつとだ。足りない、……あなたが全部ほしい」

その言葉が全部本気だとしたら嬉しいのに。そう思わされてしまうのはなぜ？

「あ、は……とのが、さ……も、立って、られな」

心許ないほど柔らかい熱をたつぷり含まされ、味覚まで支配されて気が遠くなる。なぜだか下腹部が緩く痺れてきて怖かった。咄嗟に彼の左肩のシャツを掴めば、足の間に殿谷さんの左膝が入り込む。その状態で腰を両側から掴み、彼の太もの上へと落とされて、私は首を左右に振る。

「んあっ……だ、め、ダメ、え……っ」

ここは一階だ。誰かがボタンを押したら扉が開いてしまう。

「警告はしましたよ……甘い声で呼ぶなど。理性の限界だと」

膝を左右にぐつと押し付けられて、足の付け根が疼くように痺れを増した。危うく思えるのは体勢だけの所為じゃない。何かが入み上げてくる。だめ、としがみついて訴えるけれど、腰を捕まえた手は容赦ない。

「ヤ、やあ、つア、殿がや、さん、いや、おかしく、なっちゃ……」

「だから、呼ぶな……っ」

ますます強く押し付けられ、太ももを前後にこすり付けられ、感じたことのない高みが迫ってくる。彼の唇は口の右端から頬、こめかみ、首すじを辿っていつて喉笛をクチチュリと噛んだ。

途端、ビクンと背が反って目の前に閃光が弾ける。

「ああッ、やつ、変……へん、……あ、あ……！」

勝手に跳ねる腰と肩。体の芯を駆け抜けるのは深い酔いだ。何が起こったのかわからないまま、起きているすべてのことが快感の一部でしかなかった。蕩ける感覚に戸惑う私を、殿谷さんは許してくれない。

「……感じてるんですね、可愛い……」

太ももをまだ押し上げて、手をブラウスの裾から滑り込ませてくる。下着を強引に持ち上げられ、胸の膨らみを掌でゆったり揺らされて、熱いため息が漏れた。

「は、あう……これ、な、に……全身、甘い」

「もつと？」

「ん……」

頷けば、足の付け根に円を描くようにゆったりとした刺激を与えられて恍惚としてしまう。胸の先は親指の腹で優しく撫でられ、指先まで甘く溶けそうだった。身を委ねて快感を受け入れる私を、殿谷さんは目を細めて喜ばしそうに見下ろしてくる。

「あ、あ……ッ……う」

「僕が相手なのに、こんなに乱れてくれる……」

見れば、彼の肘は器用に時折『閉』のボタンを押して、扉が開くのを阻んでいた。永遠にここが密室ならいいのに。だって、殿谷さんの腕の中、心地いい……

「そんなに油断していると攫いますよ。攫って閉じ込めて、気を失うまで悪いことをしましょう」

「……わるい、こと、……これ、が？」

ええもちろん、と囁かれて、私はぼうっとしたままかぶりを振る。

悪いこととは思えない。

「だって、嫌じゃない……です」

無我夢中で抱き締められるのは嬉しかった。それほど好きだと言われているみたいで、まだ足りないくらい心地よかった。

だからかまわないと思ってしまう。このまま攫われても、何をされても。

殿谷さんになら。

「煽りすぎですよ、未積さん」

困ったような笑い方が、胸をきゅんとさせる。

理性と本能の間でさまよいながら彼の胸に額を寄せると、図書室の懐かしい匂いが鼻を掠めて、切ない気持ちが込み上げた。

ひとしきりのキスのあと、ぼうっとしたままタクシーに乗せられ、見送られる。まだ帰りたくない、とは言わせてもらえなかった。彼からのメールが届いたのは自宅が間近に迫った頃だ。そのメールは携帯電話だけでなく私の心まで震わせた。

『無茶をしてみませんでした。次回、挽回させてください。＼コヒシイ』
末尾の四文字は、太宰治が手紙の欄外に添えたという求愛の言葉だった。